

早期胃癌の年代別推移 (第1報)

富 所 隆¹⁾・家 田 学¹⁾・戸 枝 一 明¹⁾
 織 田 克 彦¹⁾・杉 山 一 教¹⁾・前 田 春 男²⁾
 金 沢 信 三³⁾・芥 藤 聡 郎³⁾・角 原 昭 文³⁾

はじめに

最近内視鏡的診断学の進歩，胃集検の普及に伴って胃癌の死亡率は少しずつ減少の傾向を認めている。これは早期胃癌の発見が，大きな役割になっていることと推察される。そこで今回昭和46年～58年の13年間の早期胃癌症例について年代別の形態的な推移を中心に検討を加えた。

I 対象および研究方法

昭和46年～58年の13年間で当院で切除された早期胃癌は279例，305病巣である。このうち単発が257例，多発例が22例（7.1%），48病巣，総計305病巣であった（表1）。これらの症例をⅠ期（昭和46年～49年），Ⅱ期（昭和50年～52年），Ⅲ期（昭和53年～55年），Ⅳ期（昭和56年～58年）の4期に分け，それぞれの年代別に，早期胃癌の推移を検討した。

表 1

対 象	早期胃癌切除例	
期 間	S.46～S.58 (13年間)	
症 例 数	279例	
病 巣 数	305病巣	
単 発 例	257例	257病巣
多 発 例	22例	48病巣

II 成 績

1. 年代別頻度 (図1)

各時期の早期胃癌の症例数はⅠ期72例79病巣，Ⅱ期62例67病巣，Ⅲ期60例63病巣，Ⅳ期85例96病

巣であった。Ⅰ期～Ⅲ期までは平均して年間20例前後であるが，Ⅳ期は30例弱と最近症例数は増加の傾向にあった。

2. 年齢と性別 (図2, 図3)

全体では50才台に peak が見られ，平均年齢は57.2才であった。男性184例，女性95例で，男女比は1.94であった。

各年代別に年齢の推移を見ると，70才以上がⅠ期では12%であったものが，Ⅲ期・Ⅳ期では24%に増加しており，逆に40才台の症例がⅠ期の28%からⅣ期には12%にまで減少し，早期胃癌患者の高齢化がみられた。

図1 年度別早期胃癌患者数

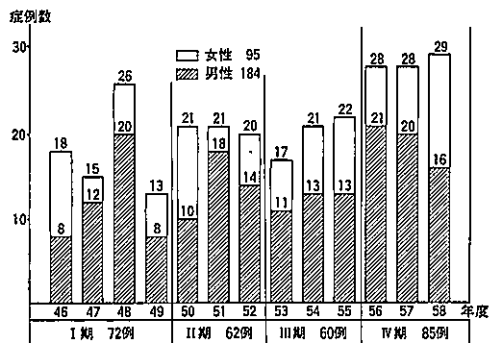
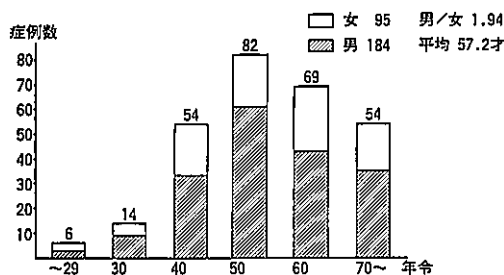


図2 早期胃癌の年齢分布



¹⁾長岡中央総合病院内科 ²⁾同放射線科 ³⁾同外科

図3 早期胃癌患者の年齢の推移

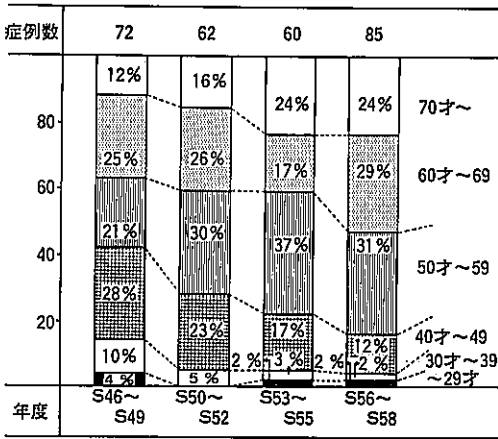


図4 早期胃癌の発見経路

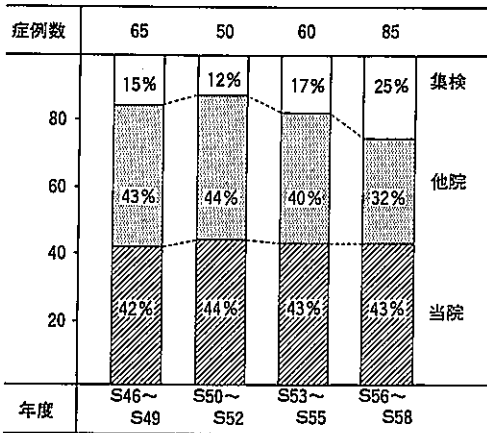
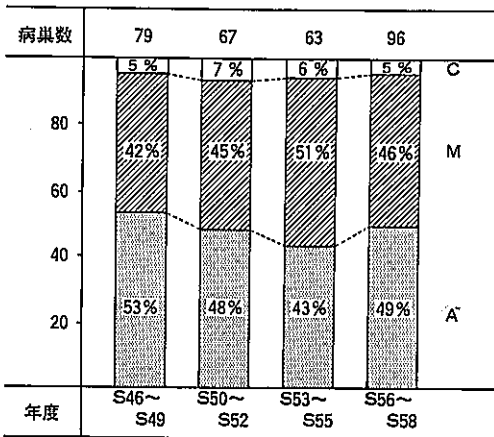


図5 早期胃癌の部位別頻度



3. 発見経路 (図4)

各症例の手術に致った経路をみると、胃集検で

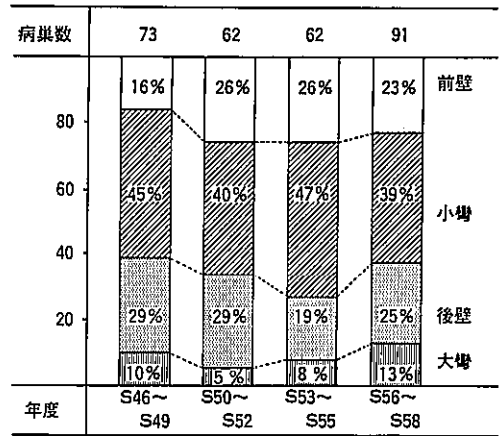
発見された例が、I期の15%からIV期には25%にまで増加しており、胃集検の役割が大きいものと考えられた。

4. 部位別頻度 (図5, 図6)

1) CMA分類別頻度

胃癌取扱い規約によるCMA別頻度の年代別頻度は、C領域ではI期～IV期まではほぼ一定して5%～7%の間であった。この数字は全国平均より低く、今後診断の難しいC領域の診断に力を入れる必要性が感じられた。またM領域、A領域についても一定の傾向はみられなかった。

図6 早期胃癌の部位別頻度



2) 前後壁大小彎別頻度

胃の横断面における占居部位別頻度は、小彎の病巣がI期45%からIV期で39%と減少しているのに比べ、前壁の病巣が16%から23%に増加していた。これはX線で病巣を把握し難い前壁例が内視鏡により発見可能となってきたためであろうと推定される。

5. 肉眼形態別頻度 (表2, 図7)

早期胃癌の肉眼形態を隆起型 (I, I+IIa, IIa, IIa+IIb), 中間型 (IIa+IIc, IIc+IIa) 平坦型 (IIb), 陥凹型 (IIc, IIc+II, IIc+IIb, III, III+IIc) に大別した。全体では陥凹型が最も多く過半数を占め、中でもIIc型が38%と最も多かった。次いで隆起型が多く、平坦型 (IIb) は5例 (1.6%) のみであった。

年代別にその推移を見ると隆起型がI期28%からIV期には17%にまで減少し、そのかわりに中間

表2 早期胃癌の肉眼型頻度

分類	基本型	病変 (%)	病型	病変 (%)
隆起型	I	29 (9.5)	I	28 (9.2)
	IIa	44 (14.4)	I+IIa	1 (0.3)
中間型		40 (13.1)	IIa	41 (13.4)
			IIa+IIb	3 (1.0)
平坦型			IIa+IIc	31 (10.2)
			IIc+IIa	9 (3.0)
陥凹型	IIb	5 (1.6)	IIb	5 (1.6)
			IIc	116 (38.0)
	IIc	169 (55.4)	IIc+III	51 (16.7)
			IIc+IIb	2 (0.7)
	III	18 (5.9)	III	15 (4.9)
			III+IIc	3 (1.0)
合計		305 (100.0)		

図7 早期胃癌肉眼型の年代別推移

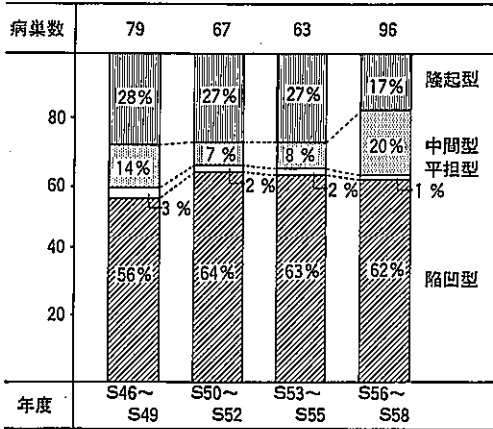
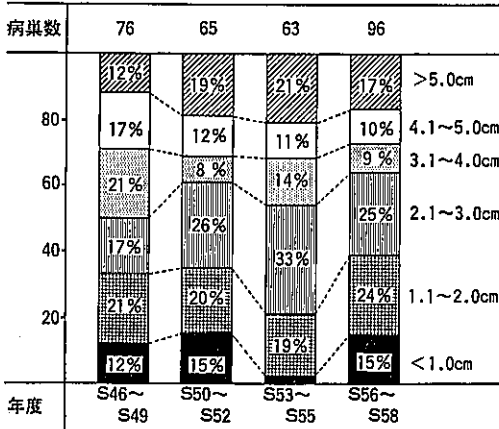


図8 早期胃癌の長径の推移



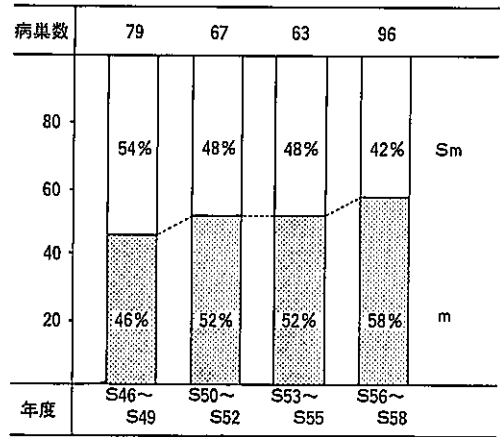
型がI期14%からIV期20%に、陥凹型がI期56%からIV期62%に増加していた。

6. 大きさ(長径) (図8)

病巣の最大径を1cm以下, 1.1~2.0cm, 2.1~3.0cm, 3.1~4.0cm, 4.1~5.0cm, 5.1cm以上の6群に分類してみた。1cm以下のものは, I期12%, II期15%と増加の傾向をみたが, III期において3%と減少しており, 全体としてはほぼ10%前後であった。また5cm以上の例は, I期12%, II期19%, III期21%に増加傾向にあったが, IV期で17%とやや減少する傾向をみせた。全体的にみても残念ながら早期胃癌がより小さいうちに発見されているという傾向はみられなかった。

7. 深達度(図9)

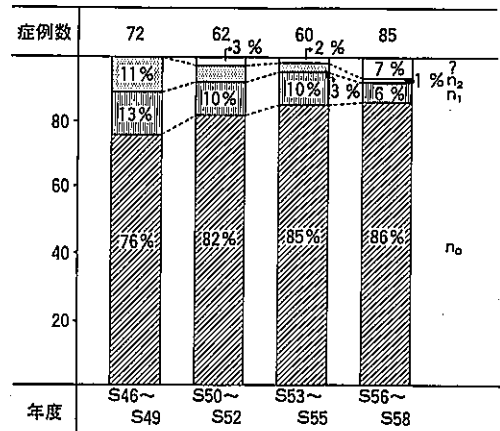
図9 早期胃癌の深達度の推移



m癌はI期46%から次第に増加し, IV期では58%を占めていた。

8. リンパ節転移(図10)

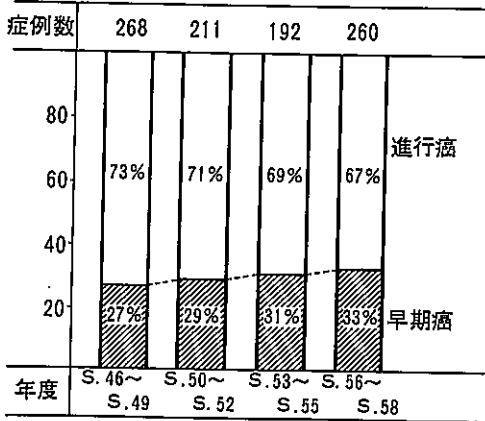
図10 早期胃癌のリンパ節転移の有無



I期では $n_2(+)$ の症例が11%もあったが、IV期では1%にまで減少していた。逆に $n(-)$ の症例はI期76%からIV期では86%にまで増加していた。

9. 切除胃癌に対する早期胃癌の頻度 (図11)

図11 切除胃癌に占める早期胃癌の頻度



I期の切除胃癌は268例で、早期胃癌の割合は26.9%であったが、II期では211例中62例29.4%、III期192例中60例で31.3%、IV期260例中85例32.7%と少しずつ増加の傾向にあった。

III おわりに

昭和46年~58年の13年間に当院で切除された早期胃癌の数は279例305病巣であった。近年胃集検および内視鏡診断学の進歩に伴い、当院でも確かに早期胃癌の頻度は増加しているが、いまだ①C領域の癌が少い。②癌の長径が大きいものが多いなどの問題点のあることがわかった。また早期胃癌患者の高令化を知ることができ、今後の胃集検、診療に役立てることが可能かと思われた。

稿を終えるにあたり、初期の頃から早期胃癌の診断と加療に尽くされた諸先生に感謝いたします。